標点

非認知能力を育てる

県教育庁義務教育課長
石本　康一郎

ある幼稚園で保育参観をしたときの出来事である。子どもたちは砂場で何やら相談を始めた。砂山を作って、高さが異なる二つの地点から穴を掘り、一つのトンネルにし、水を流してウォータースライダーにして船を流すという壮大なプロジェクトのようだ。子どもたちは完成のイメージを共有し、早速、作り始める。

ところが、途中のイメージの共有と意思疎通が上手くいかず、なかなか進まない。山を作っても崩れ、思い思いの方向に穴を掘るのでトンネルが開通しない。一度にたくさんの水を運ぼうと大きなバケツを使うが重くて一人では運べない。水を流しても砂にしみ込んでウォータースライダーにならない。

しかし、子どもたちは諦めない。一つ一つの壁を、先生の支援と自分たちの知恵、そして友達同士の対話で解決していく。先生に小さなバケツを用意してほしいと頼む子ども、砂を固めるための板を探す子ども、穴を掘る二人に「もう少し右！」とアドバイスする子ども、水がしみ込まない方法を相談し、古い雨どいを使う子ども…。

「ああでもない、こうでもない」と思いを出し合い、ぶつかり合いながら試行錯誤し、やがてウォータースライダーは完成した。子どもたちの発想やアイディア、諦めない気持ち、意欲や協調性に感心した。

「幼児期に非認知能力を」という話をよく聞く。非認知能力とは、粘り強さや我慢する心、やり抜く力や協力する力などである。幼児期の遊びや学びの中で培った非認知能力は、小学校以降の学習の土台となる。これまでも幼稚園などで大切にしてきた能力であり、家庭生活の中でも育ててきた能力である。変化の激しいこれからの時代を生き抜く子どもたちにとっては、これまで以上に必要な能力でもある。

本の読み聞かせで感受性や想像力を、友達との外遊びで協調性や知的好奇心を、手伝いで責任感や忍耐力を、地域行事で社会性や交渉力を、家庭での時間管理で計画性や見通す力を、上手くいったときにしっかり認め、失敗したときに心から励ますことで自己肯定感や逆境に負けない強い心を育てることができる。今後も、就学前教育において、こうした能力を育てる取組が充実するよう、尽力したいと考えている。